

なる様になる迄だ

「いやだと、逃げられないではないか。バスに乗らないで、歩くわけにも行かん。」
 「運ちゃんを信じろ、死ねばその時。」
 と、やっと割り切る気持ちになった。
 自分の運命、人に任せただけから、
 「なる様になる迄だ」と、割り切る。

緑の合間をぬって、山の頂きへと、バスは進み、頂上で、ロープウェイに乗った後、四時半迄、解散。
 海拔千数百メートルで、大変ひんやりする。
 ルームクーラーの前に立った時の、あの気持ちのいい風と同じ風が、汗で輝く僕の顔を冷やしてくれる。

のんびりしてた。
 遠く、青い有明海を眺め、彼女をしのぶ。
 彼女に八日に会う時、どう対応しようかと
 思案、思案で、気が重いが、
 「なる様になる迄だ」と元気づける。

再び、バスに乗り、雲仙湯の町へと、バスは進む。
 硫黄の臭いがつんと来て、
 おもむきある静かな町にバスは入った。
 旅館「よろず屋」に着いた時は、
 僕は、本当に疲れてた。
 飯を食べ終わると、すぐに、部屋に閉じ籠もり、
 部屋から旅館街の様子を見るだけで、
 すぐに、ぐったり眠りについた。